世界文明の時代における日本の精神性

Japanese Spirituality and the Age of World Civilization

ガニェ・アイザック Isaac Gagne

要旨

現代世界には，様々な主義，宗教や考え方が共存または競合している。国，民族，社会，世代，ジェンダー，個人によってそれぞれの視点と価値観が異なるであろう。この状況において，バハイの世界文明というヴィジョンをどのように実現できるか？特に宗教に極めて敏感で懐疑的な現代日本社会では，バハイの教えをどのように紹介し，提供すればよいか？本稿では，道徳性(Morality) と倫理(Ethics)という二つの観点からバハイ教の教えを概念化し，バハイ教と日本社会における精神性との接点，また日本社会と世界文明との接点にとってどちらがより効果的かという問題を考察し，話し合う。

はじめに

本稿では，バハイ教と日本社会の道徳と倫理の共通点について発表をさせていただきます。まずは，社会文化人類学を簡単に説明します。次に，日本における宗教に対する警戒感と受容性について説明し，日本の道徳と倫理の由来とあり方について考察します。最後に，バハイ教との共通性について述べ，皆様の個人の経験などについてディスカッションしたいと思っております。

社会人類学という分野について

さて，社会文化人類学とはなんでしょうか？私の研究は社会文化人類学に基づいていますが，基本的に言えば，社会文化人類学は人間の信仰･生活･言語･芸術･思想といった社会と文化を包括的に研究することを通して，人間の普遍的な共通点を探る学問です。具体的には，社会学の統計的分析法，心理学の個人的分析法，あるいは宗教学の教義的分析法とは異なる目的と研究法を用います。つまり，一人一人のライフ･ストーリーと経験を質的に分析することを通して，現代社会に生きる人々の人生に意義を見つける過程を解読すること，そしてこれによって人類という種の一体性と調和を伝えることが社会文化人類学の目的と言えます。

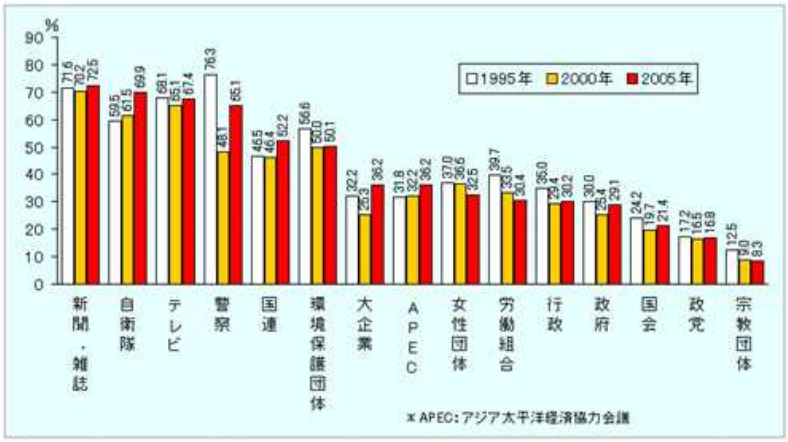
研究方法として，社会文化人類学は 1) 参与観察 (Participant Observation)，2) 面接，3) エスノグラフィーという三つの方法を使用します。参与観察とは，文化人類学の代表的なフィールド･ワークの方法で，人々と共に生活をし，儀式や活動に参加して，あらゆる出来事を観察しながら体験することです。面接とは，正式的なものからカジュアルな会話まで，人々の話を聞くことです。そして，エスノグラフィーとは，経験と分析をまとめた論文を書くことです。

明らかに，社会文化人類学の目的は，バハイ教の理想と世界文明の創立に近いと言えます。私がこれに気付いたのは，バハイ教の皆様と一緒に勉強し始めたころでした。私はバハイではありませんが，博士論文の研究テーマは「日本の精神性と将来のモラルと倫理観」で，この研究

のためにバハイ教といくつかの日本の宗教団体や社会的団体で勉強することになりました。勉強すればするほど，日本社会における道徳性と倫理観は，バハイ教の理想と共通点があることに気付きました。

日本における宗教に対する恐怖感

図 1 をご覧ください。日本では，宗教団体に対する信頼度は，他の組織に比べて非常に低いです。オウム真理教の事件以来，12.5%というすでに低かった信頼度は 8.3%にまで下がりました。それに対して，全体的な傾向として，新聞･雑誌といったマスコミの信頼度は 72.5%にまで伸び，テレビ (67.4%) も非常に信頼されています。



(注) 18歳以上男女1,000サンプル程度の回収を基本とした意識調査の結果である。数字は各組織・制度に関し「非常に信頼する」と「やや信頼する」の回答率の計。各組織・制度は2005年の信頼度の高い順に並べた。

図 1 組織･制度への信頼度の推移[2]

(**出典**: Honkawa Data Tribune: http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/5213.html)

バハイ教を含め宗教の発展において，これは確かに遺憾ともしがたい，また，改善しなくてはならない状況です。しかし，この調査結果には，ポジティブな側面もあります。それは，日本人はメディアばかりに頼っているというわけではないということです。たとえば，他に信頼度が高い組織には，自衛隊 (69.9%)･警察 (65.1%)･環境保護団体 (50.1%)･大企業 (36.2%) などがあげられます。

また，国連や APEC という国際的な組織に対する高い信頼度は，非常に励みになります。国連に対する信頼度は 10 年前より 6%上がっており (52.2%)，APEC に対する信頼度は 5%上がりました (36.2%)。言い換えると日本では，宗教団体は信頼されていなくても，国際的な組織に対する関心や信頼度は高いので，世界の一体性の理想を掲げる国際的共同体であるバハイ教にとっては吉報と言えましょう。

さて，日本では，宗教に対する恐怖感･警戒感の歴史は主に四つの時期に分けられ，それぞれ原因となる背景が異なります。

---

[2] 図1～4のデータは統計数理研究所の「日本人の国民性調査」(http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/index.htm) による

まずは 19 世紀まで続いたキリスト教への警戒感です。16 世紀にザビエルが日本を訪問してから，キリスト教は徐々に普及しました。当時，日本の最初のキリスト教者と呼ばれているアンジローは，「日本人はすぐには帰依しません。まずは，様々な質問を問いかけ，ザビエルさんの答えを慎重に考慮します。また，その上，ザビエルさんの言動と教えが一致するかどうかを観察します。もしこれらの点で納得したら，つまりザビエルさんの適切な答えと申し分のない生活を証明でき，これが十分に考察されたなら，天皇も貴族も知識人もすぐ入信します。そこから半年くらいで全国に普及します。日本人は必ず理性に従って行動するからです」とザビエルに語りました。しかし，外国からの影響を恐れていた徳川幕府と鎖国政策の影響で，キリスト教が弾圧を受け，評判がだんだん下がりました。明治維新以降，信仰の自由が定められましたが，一般の大衆の間には神道系と仏教系と名付けられた民族宗教的な新宗教が普及し，キリスト教の魅力は上層階級と国際的な見識を持っている知識人に限られていたと言えます(参照 Earhart 2003; Davis 2007; 島薗 2001)。

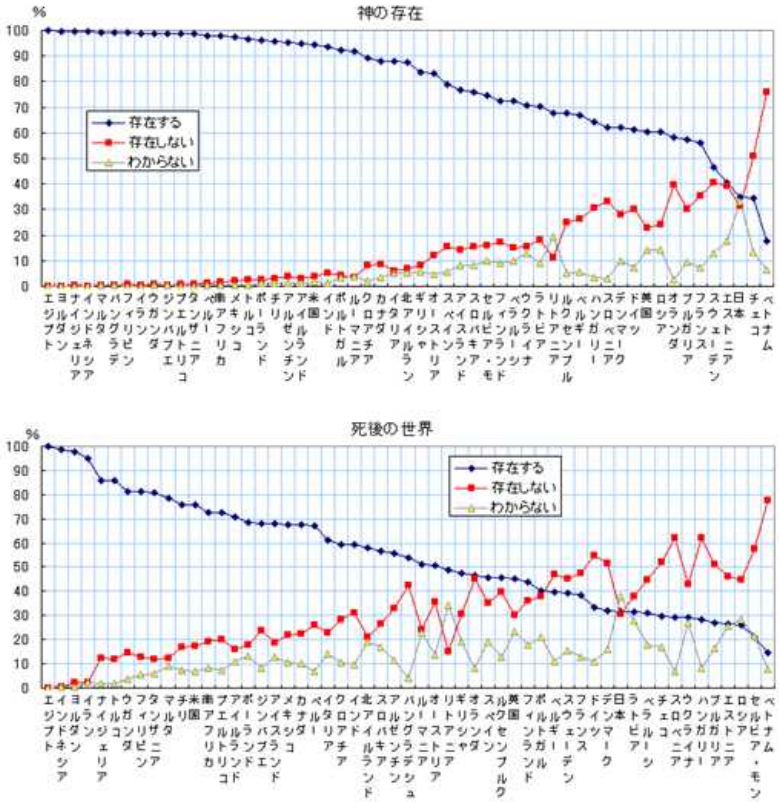
二番目の時期は，20世紀前半で，それは，アジアへの侵略と日本の軍国化の時期であり，特に第二次大戦前と最中，天皇と軍国体制に従わない宗教にとっては苦難の時期でした。また，すべての宗教団体が仏教系，神道系またはキリスト教系の団体として登録を義務付けられました。外来宗教はもとより，国産のいわゆる新宗教も弾圧を受け，宗教という概念自体が軽蔑されるようになりました。この時期，バハイ教は宗教団体として政府に正式に認定されていませんでしたが，アグネス･アレキサンダーなどのバハイが日本で活躍し始めていました。バハイは政治的に中立であったため，政府からの理解を得て，1930 年代の後半までは弾圧などはあまりなかったようです(参照 Alexander 1977)。

第三期は，第二次世界大戦が終わった後で，アメリカの政治哲学思想の影響で，宗教の自由が改めて見直され，宗教団体の数も増加しました。キリスト教，バハイ教，イスラム教，仏教などの宗教団体にとって，これは良いことでしたが，他方，個人的な利益を追求する教祖も現れ，いかさま的な宗教も増えました。教団の脱税や指導者の性的搾取などの違法行為や非倫理的な活動が暴露され，宗教団体全体が金儲け主義などの疑いでマスコミや国民に批判されました。

このような批判が続いたにもかかわらず，第四期となる 1980 年代には様々な宗教団体が新たに出現し，拡大しました。しかし，1995 年に，オウム真理教という閉鎖的で反社会的な教団幹部が松本市と東京の地下鉄でサリン･ガスをまき，一般人を殺害しようとしました。最終的に，7 人が殺され，500 人以上が被害を受けました。その結果，1995 年以降，宗教団体に関する法が強化され，また「宗教」というもの自体が悪質カルトと同一視されるようにさえなりました。この宗教に対するアレルギーが，今なお続いていると言えるでしょう。

日本における宗教性の受容性

現在，宗教に対するアレルギーが続いていると言いましたが，歴史的には，日本社会の宗教に対する受容性は低くはないとも言えます。たとえば，図 2 に見られるように，神の存在 (図 2-a) や死後の世界に対する見方 (図 2-b) は，「存在する」，「存在しない」，「わからない」という回答がそれぞれ均等にあり，日本人全体としてのやや曖昧で，どちらともつかない態度を示しています。これは，他の国に見られない，特異な現象です。



(注) 各国の全国18歳以上男女1,000サンプル程度の回収を基本とした意識調査の結果。

図 2a, 2b:**神の存在･死後の世界に対する見方**

(**出典**: Honkawa Data Tribune: http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/9520.html)

別の調査 (図 3) **では，信仰について世代別･時代別に分析しています。特筆に値するのは，**1958 **年の経済成長が始まった頃，**20 **代の若者の** 14%**だけがあの世を信じていたのに対し，**50 **年後の** 2008 **年には，同じ世代の若者のうち** 49%**があの世を信じるようになったことです。ただし，信仰を持っているかどうかという質問に対する答えは** 13%**から変わっていません。その理由のひとつは，宗教･信仰という言葉に対する批判的な固定概念がいまだに強いからだと言えるでしょう。**

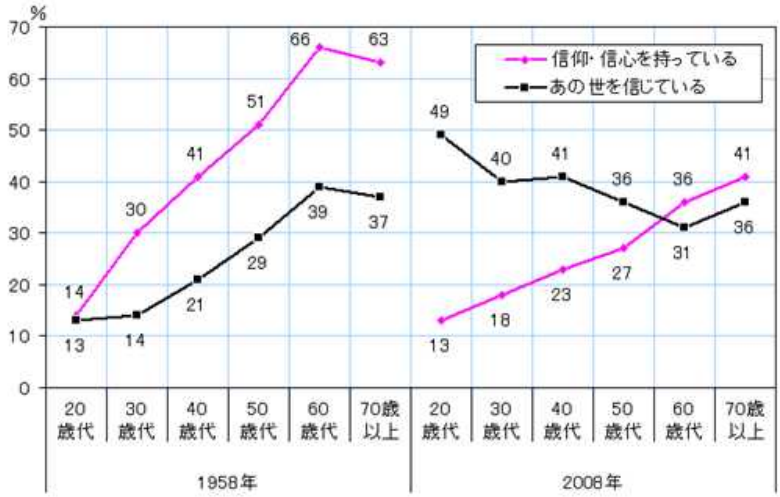


図 3：宗教心の二つの側面

(**出典**: Honkawa Data Tribune: http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3971a.html)

次に，奇跡やお守り・お札の力を信じる調査を見てみましょう（図 4）。これは，精神性と宗教性の側面をいくつか表していると言えますが，16 歳から 29 歳の世代はもっとも高い関心を持っているようです。これは 35 年前と比べて，全面的に上昇しています。

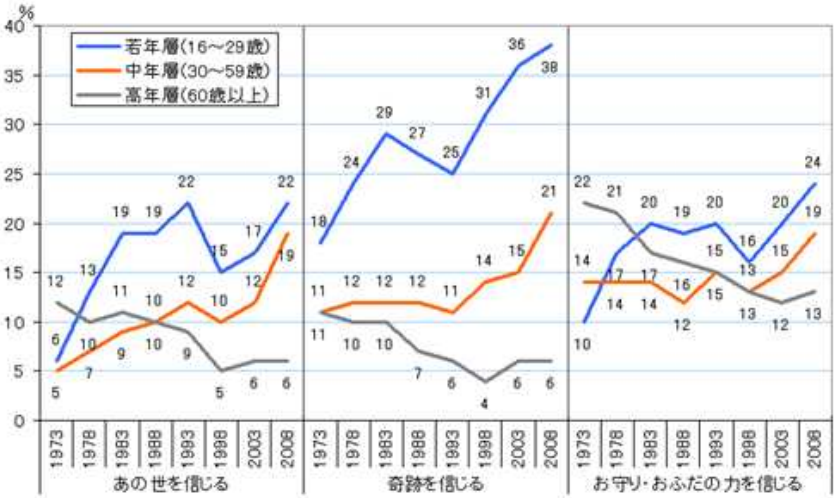


図 4 ：非合理な力を信じる若者の増加

(**出典**: Honkawa Data Tribune: http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2927.html)

日本人の宗教的な活動に関しては，以下のような調査結果があります。

2003 **年 国学院大学の調査**(2003 **年**)：「**どの活動に参加しますか？**」

初詣：72.6％
お墓参り：76％

ただし，このような調査を参考にするにしても，調査の質問と国民の歴史的な背景も配慮しなければなりません。

そもそも，「宗教」という言葉はキリスト教の影響で作られ，使用されるようになりましたが，この言葉が作られる前には，「宗派」や「信仰」という言葉が用いられていましたし，言葉として表現されないこともありました。したがって，現代社会の宗教に対する感覚を研究するには，「宗教」という言葉や概念より，「宗教性」や「精神性」の方が適切でしょう(参照 Earhart 2003; Davis 2007; 島薗 2001)。

私の経験では，日本人と話をする時，それが宗教団体に属している人であろうとなかろうと，世界文明や精神的な特質といった話題が取り上げられると，それらはほとんど宗教的な話としては語られません。しかし，日本人と話せば話すほど，宗教や信仰において様々な背景を持っていても，精神性や倫理的態度において多くの共通性を見出しました。これは，日本社会の柔軟な宗教性・精神性につながっていると思います。

数千年からの神道の神々への崇拝は，日々奮闘する自然との闘い，日常生活の問題に関係する信仰であったと言えます。そして，古代朝鮮から導入された仏教は，生と死，また自分というものに関する信仰でしたが，神道とは殆ど矛盾することなく，調和良く共存してきました(参照 Earhart 2003; Davis 2007, 1980)。キリスト教が強制的に制限されたにもかかわらず，キリスト教の影響により，教義の強化や組織的な社会福祉と世界規模の救世思想も日本中に普及してきました。江戸時代後半から明治維新までの産業革命と近代化による社会的・生活上の変化の影響で，新たな生と死の見方が生み出され，また生きるという意味が再検討されました。これらによって，新しい精神的な運動と信仰の表れがいわゆる新興宗教の形で登場しました。この意味では，歴史的に見れば日本社会における宗教性がバハイの「累進的啓示」に近い現象と言えるでしょうか。簡単にまとめてみると，日本の宗教性の歴史は，欧米の宗教の克服と否定と違って，新しい精神的な教えが現れると，過去の教えが上書きされるようになり，現代に適応できる形になる過程にあると言えるでしょう。

この宗教性の歴史的な展開を見れば，分裂や対立，また批判や弾圧があっても，宗教的な形をより深く分析してみると精神的な倫理観と道徳観（モラル観）が殆ど変っていないとも言えます。社会上の宗教問題は殆ど政治的また物質的なものに限られ，思想としての対立や批判はほとんど見られていません。

したがって，私が研究してみた限り，日本人が共有している倫理観と道徳観は　日本社会の将来の文明，また世界文明の基盤になり得ると思っています。

日本のモラル観・倫理観

さて，日本の道徳・モラル，また倫理はどのようなものでしょうか？私が今まで見た調査の中で，特に気になったのは社会貢献意識に関する調査でした。この調査の結果（図 5）を見ると，「何か社会のために役立ちたいと思っている」と答えている人が 65.2%です。これは去年より4％の減少ですが，1974 年からの傾向としてまだまだ全体的に上昇傾向にあります。

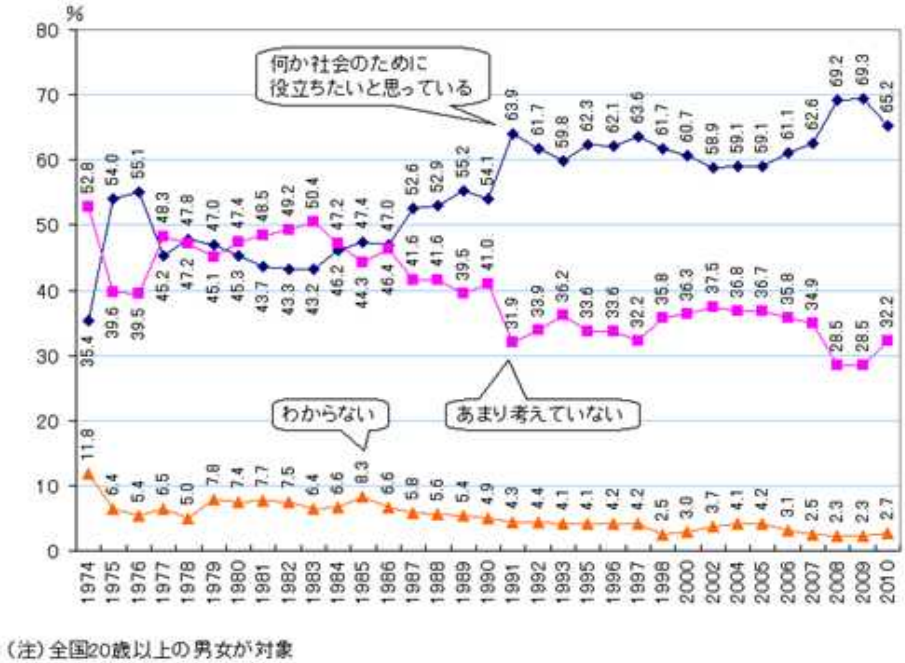


図 5 ：社会貢献意識の高まり

(**出典**: Honkawa Data Tribune: http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2990.html)

包括的にみると，日本社会のような死後の世界や神の存在に関する関心が曖昧であると同時に，奇跡やお守りなどを信じている人も多い国，また宗教団体の信頼感が低いが国連と APEC **のような国際的な組織を信頼している人も多い国の場合，どのようにバハイ教が想像している世界文明を実現できるでしょうか？**

そこで，以上の社会貢献意識が深く関連していると考えられます。この社会貢献意識の中心では，社会を重視している信念，つまり自分と他人とのつながりという関心だと私は思います。自分と他人とのつながり，また自分と世界とのつながりは道徳と倫理の領域にあります。

日本の道徳観と倫理観を考察してみると，複数の影響が見受けられます。まずは，モラルの制度として，儒教，仏教また西洋宗教の影響が見られます。非常に簡単にまとめてみれば，これらはある程度制度化された行動の枠組でもあり，善と悪という判断基準もそれらの枠組を通して定められています(see Rogers 2009)**。制度として儒教，仏教またはキリスト教などの宗教的概念は日本の文化と社会構造に大きく影響してきましたが，これらはモラル制度としての善悪基準の影響はどのようなものでしょうか。儒教，仏教やキリスト教はモラルの制度を提供するとともに，倫理的な考え方と行動も提供します。しかし，日本の倫理観**(see Rogers 2009)**，つまり日々の実践に関する見方と行動は儒教，仏教とキリスト教のモラル制度を重視しているというわけではありません。少数のエリートや宗教者を除き，一般の人々はモラル制度というより日々の実践，つまり日常の倫理的言動のほうを大切にします。これらの倫理観は様々な影響がありますが，主に儒教の正しい行動，神道と仏教の生と死に対する敬意，また民主主義の平等に関する考え方が取り上げられます。つまり、日本のモラル制度というものは個人個人のレベルでの自分と社会との接点という社会的に意識している観点に基づいていると言えるでしょ**

う。

そこで，倫理会という日本でもっとも影響力のある，また一般の人々の間に普及してきた倫理団体の倫理観を紹介します。倫理会は仮名です。

倫理的とされている儀式を別として，この団体の倫理観そのものを否定する日本人は殆どいないと言っても良いです。なぜなら，この団体の倫理観は日々の挨拶と礼儀の大切さ，家族的，社会的な役割を果たすこと，あらゆる信仰を尊敬すること，また自然な生き方という大自然の摂理を重視することだからです。これらは儒教の社会的な教えと神道の自然的な教えの融合とも言えるでしょう。ここで，一つ一つの内容は様々な解釈があると思いますが，基本的にはこの倫理観は一般日本人にとって受け入れやすいと思われます。

驚いたことに，この倫理観の背景にあるモラル制度を見てみると，バハイ教のモラル観と殆ど変りません。大自然という言葉が使用されても，実際に神という意味合いが強いです。また，もっと具体的に言えば，この団体の目的は，家庭愛和から始まる世界平和で，その手段として日々の反省と自分の人生に対する感謝が強調されます。

このような点に対して，一般日本人も，あらゆる新宗教や既存の宗教の信者も，またバハイ教の信者も共感できるでしょう。しかしながら，このモラル観で世界文明を作るのは，まず一般の人々にこの共有しているモラル観を気付かせることが大事でしょう。バハイのような教団や倫理会のような団体の組織や儀式が分かりにくい・従いにくいと思われても，こうしたモラル観自体を否定する人はほとんどいないでしょう。

したがって，日本の一般的に通じる倫理観，つまりお互いに対する思いやり，社会のために役割を果たすこと，また大自然に一致している生活を送るという考え方はバハイ教の世界文明のためにも大事です。そのうえ，日本における倫理観の後ろにある儒教・仏教・キリスト教や戦後の民主主義に影響されたモラル観，つまり世界平和，あらゆる信仰を受け入れることおよび大自然への感謝と尊敬という考え方も世界文明のために欠かせないものでしょう。

社会文化人類学の視点から見たモラル・倫理

社会文化人類学者にとっては，こうした社会学的な調査と図や宗教学的な倫理観とモラル観より，個人個人の体験と解釈のほうが人間的で意味深いです。そこで，私の一年以上の経験では，様々な信仰を持っている人，組織に属している人，また信仰も組織も疑う人と話してきました。さらに，複数の団体の儀式と実践にも参加してきました。この経験を通して，いくつかの共通点が頻繁に浮かび上がりました。この点を簡単に説明させていただきます。

1. 宗教というものに対する違和感があっても，精神性というより広いものを大事にする人が多いです。
2. 自分は信仰を持っていなくても，相手が信仰を持つことは殆ど問題にされていません（相手の信仰によって自分との関係が悪く影響されていない限り）。
3. 世界や日本の中で，様々な宗教が主張している唯一の神や宗教は非常に閉鎖的だと思われています。しかし，日本では，すべての神が実際に同じ普遍的な神であるという意識は　欧米より比較的に高いです。
4. 現在の日本で，神道や仏教の神社とお寺，またキリスト教風の結婚式や祝祭日の文化的共存から見ると，昔からの八百万（やおよろず）の神々という民族宗教的・神道的な意

識はいまでも続き，様々な信仰が和合しているという非常に珍しい社会現象があると言えます。

5. 組織として，日本人は宗教団体や政府などの国内機関に対して懐疑的であっても，国際機関，たとえば国連や APEC は比較的信頼されています。ここで，バハイ教が国連に認められ，また協力しているということが知られれば，バハイ教に対する信頼感も高まるでしょう。
6. 最後に，日本に住んでいる多くの人々は安定した人生を望とともに，社会的な意識も高いです。昔の近江商人のスローガンが表すように，日本では古くから『三方よし』という信念があります。これは，「自分よし，相手よし，世間よし」を意味します。前に紹介した倫理会も，「我も人もの仕合わせ」という同様な表現もあります。もちろん，バハイ教から見れば，これらは神と魂という基本的なものが欠けているとすぐ気付きます。また，自分が相手より優先されているとも聞こえるでしょう。しかし，バハイのルヒ・インスティチュートの最初のレッスンで取り上げているように，自分の心を磨かなければと，他の人々にバハイ教の喜びを教えられないでしょう。

まとめてみると，世界中のすべての国々と同じように，日本の精神的・宗教的・道徳的・また倫理的な歴史は複雑で非常に深いものです。神道の倫理観，儒教の倫理と倫理制度，仏教の精神的な教えやキリスト教と戦後の民主主義の倫理観とモラル観などが様々な影響を日本社会に与えてきました。これらの融合と和合の過程と共存性はすべて日本文化とも言えます。

世界文明は，一つ一つの国々から始まります。そして，国という政治的・社会的なものは，様々なコミュニティーからできています。さらに，一つ一つのコミュニティーも，一人一人の人間から成り立っています。したがって，自分よしから相手よしに，そして相手よしから世間よし，また最終的に世間よしから世界文明まで及ぶ幸福と平和ができるはずです。この種は日本の土にもうすでに植えてあり，日本の二〇〇〇年以上の歴史を振り返ってみれば，この種はもうすでに様々な宗教的・社会的な形で信仰の芽吹き（めぶき）を出ししています。現在のチャレンジは，これらの芽吹きの根本，つまり人類と宗教の一体性を日本の人々，そして世界の人々に証明することです。

ディスカッションのための質問

1) 一般的に言えば，日本人の人生の中では，気付いていない精神的な行動や信仰は何がありますか？
2) 無神論の日本人と話す際，バハイ教の一番理解しにくい教え，信念または儀礼は何ですか？
3) 他宗教の日本人の信者と話す際，バハイ教の一番理解しにくい教え，信念または儀礼は何ですか？
4) あなたがバハイになった時，何が一番受け入れにくかったですか？または，バハイとして育てられたことで，一般社会に通じないものは何かありましたか？
5) 人間的な共同体として，バハイ共同体は日本の他の共同体とどう違いますか？

6) 一般の日本人と違って，バハイの信者になったら，またバハイ共同体のメンバーとして，どのような新しい可能性・機会がありますか？
7) バハイ教の倫理観と日本社会が重んじる倫理観はどのような相違点がありますか？
8) ぜひ，皆様のご質問やご意見をお聞きかせ下さい。

引用文献

Alexander, Agnes Baldwin. 1977. History of the Baha'i Faith in Japan 1914–1938. Osaka: Baha'i Publishing Trust.

Boxer, C. R. 1967. The Christian Century in Japan, 1549-1650. Berkeley: University of California Press.

Davis, Winston. 2007. Japanese Religion and Society: Paradigms of Structure and Change. New York: SUNY Press.

Davis, Winston. 1980. Dojo: Magic and Exorcism in Modern Japan. Stanford: Stanford University Press.

電通総研「世界価値観調査 2005」国内結果レポート（2005 年 7 月調査の結果）

電通総研・日本リサーチセンター編「世界 60 カ国価値観データブック」（2000 年 7 月調査の結果）

電通総研・余暇開発センター「世界 23 カ国価値観データブック」（1995 年 11 月調査の結果）

國學院大学 21 世紀 COE プログラム「日本人の意識調査」（2003 年）

内閣府「社会意識に関する世論調査」

NHK 放送文化研究所「現代日本人の意識構造[第 7 版]」

Rogers, Douglas. 2009. The Old Faith and the Russian Land: A Historical Ethnography of Ethics in the Urals. Cornell: Cornell University Press.

島薗進「ポストモダンの新宗教：現代日本の精神状況の底流」東京：東京堂出版（2001 年）

統計数理研究所「日本人の国民性調査」（2008 年）